

さいみ かたびら 一つ送り給ひ候ひ畢んぬ。

善導和尚と申す人は漢土に臨淄と申す国の人なり。幼少の時、密州と申す国の明勝と申す人を師とせしが、彼の僧は法華經と浄名經を尊重して、我も読誦し人をもすゝめしかば、善導に此を教ゆ。善導此を習ひて師の如く行ぜし程に、過去の宿習にや有りけん、案じて云はく、仏法には無量の行あり。機に随ひて皆利益あり。教いみじといへども機にあたらざれば虚しきがごとし。されば我法華經を行ずるは我が機に叶はずばいかんが有るべかるらん。教には依るべからずと思ひて一切經蔵に入り、両眼を閉ぢて經をとる、觀無量寿經を得たり。披見すれば此の經に云はく「未来世の煩惱の賊に害せらるゝ者の為に清浄の業を説く」等云云。華嚴經は二乗のため、法華經・涅槃經等は五乗にわたれども、だいしは聖人のためなり。末法の我等が為なる經は唯觀經にかぎれり。

釈尊最後の遺言には涅槃經にはすぐべからず。彼の經には七種の衆生を列ねたり。第一は入水則没の一闍提人なり。生死の水に入りしより已来いまに出でず。譬へば大石を大海に投げ入れたるがごとし。身重くして浮かぶことを習はず、常に海底に有り。此を常没と名づく。第二をば出已復没と申す。譬へば身に力有りとも浮かぶことをならはざれば出で已はって復入りぬ。此は第一の一闍提の人には有らねども一闍提のごとし。又常没と名づく。第三は出已不没と申す。生死の河を出でてよりこのかた没することなし。此は舍利弗等の声聞なり。第四は出已即住、第五は觀方、第六は浅処、第七は到彼岸等なり。第四・第五・第六・第七は縁覺・菩薩なり。釈迦如来世に出でさせ給ひて一代五時の経々を説き給ひて、第三已上の人々を救ひ給ひ畢んぬ。第一は捨てさせ給ひぬ。法蔵比丘阿弥陀仏、此をうけてとて四十八願を發こして迎へとらせ給ふ。十方三世の仏と釈迦仏とは第三已上の一切衆生を救ひ給ふ。阿弥陀仏は第一第二を迎へとらせ給ふ。而るに今末代の凡夫は第一第二に相当たれり。而るを浄影大師・天台大師等の他宗の人師は此の事を弁へずして、九品の浄土に聖人も生まると思へり。誤りが中の誤りなり。一向末代の凡夫の中に上三品は遇大、始めて大乘に値へる凡夫なり。中の三品は遇小、始めて小乗に値へる凡夫なり。下の三品は遇悪、一生造悪無間非法の荒凡夫なり。臨終の時、始めて上の七種の衆生を弁へたる智人に行きあひて、岸の上の経々をうちすてゝ水に溺るゝの機を救はせ給ふ。觀經の下品下生の大悪業に南無阿弥陀仏を授けたり。されば我一切經を見るに、法華經等は末代の機には千中無一なり。第一第二の我等衆生は、第三已上の機の為に説かれて候法華經等を末代に修すれば、身は苦しんで益なしと申して、善導和尚は立ち所に法華經を抛すてゝ觀經を行ぜしかば、三昧發得して阿弥陀仏に見参して、重ねて此の法門を習ひ渡し給ふ。四帖の疏是なり。導の云はく「然るに諸仏の大悲は苦なる者に於て心偏に常没の衆生を愍念す。是を以て勧めて浄

土に帰せしむ。亦水に溺るゝ人の如く急に 須く偏に救ふべし。岸の上の者何ぞ用ひて済ふことを為さん」云云。又云はく「深心と言へるは即ち是深信の心なり。亦二種有り。一には決定して自身は現に是罪惡生死の凡夫なり。曠劫より已來常に没し常に流転して出離の縁有ること無しと深信す」と。又云はく「二には決定して彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受したまふこと疑ひ無く 慮り無く彼の願力に乗ずれば定めて往生を得ると深信す」云云。此の釈の心は上にかき顯はして候。浄土宗の肝心と申すは此なり。我等末代の凡夫は涅槃經の第一第二なり。さる時に釈迦仏の教には出離の縁有ること無し。法蔵比丘の本願にては「定得往生と知るを、三心の中の深心とは申すなり」等云云。此又導和尚の私義には非ず。綽禪師と申せし人の涅槃經を二十四反かうぜしが、曇鸞法師の碑の文を見て立ち所に涅槃經を捨てゝ、觀經へ遷りて後此の法門を導には教へて候なり。鸞法師と申せし人は齊の代の人なり。漢土にては時に独歩の人なり。初めには四論と涅槃經とをかうぜしが、菩提流支と申す三蔵に値ひて四論と涅槃を捨て、觀經に遷りて往生をとげし人なり。三代が間傳へて候法門なり。漢土日本には八宗を習ふ智人も正法すでに過ぎて像法に入りしかば、かしこき人々は皆自宗を捨てゝ浄土の念仏に遷りし事此なり。日本国のいろはは天台山の慧心の往生要集此なり。三論の永觀が十因・往生講式、此等は皆此の法門をうかがい得たる人々なり。法然上人も亦爾なり云云。

日蓮云はく、此の義を存ずる人々等も但恒河の第一第二は一向浄土の機と云云。此此の法門の肝要か。日蓮涅槃經の三十二と三十六を開き見るに、第一は誹謗正法の一闡提、常没の大魚と名づけたり。第二は又常没なり。其の第二の人を出ださば提婆達多・瞿伽梨・善星等なり。此は誹謗五逆の人々なり。詮ずる所第一第二は謗法と五逆なり。法蔵比丘の「設ひ我仏を得んに、十方衆生至心に信樂して我が国に生まれんと欲し、乃至十念して若し生ぜずんば正覺を取らじ。唯五逆と誹謗正法とを除く」云云。此の願の如きんば法蔵比丘は恒河の第一第二を捨てはてゝこそ候ひぬれ。導和尚の如くならば末代の凡夫、阿弥陀仏の本願には千中無一なり。法華經の結經たる普賢經には五逆と誹謗正法は一乘の機と定め給ひたり。されば末代の凡夫の為には法華經は十即十生百即百生なり。善導和尚が義に付いて申す詮は私の案にはあらず。阿弥陀仏は無上念王たりし時、娑婆世界は已にすて給ひぬ。釈迦如来は宝海梵志として此の忍土を取り給ひ畢んぬ。十方の浄土には誹謗正法と五逆と一闡提とをば迎ふべからずと、阿弥陀仏・十方の仏誓ひ給ひき。宝海梵志の願に云はく「即ち十方浄土の擯出の衆生を集めて我当に之を度すべし」云云。法華經に云はく「唯我一人のみ能く救護を為す」等云云。唯我一人の經文は堅きやうに候へども釈迦如来の自義にはあらず。阿弥陀仏等の諸仏我と娑婆世界を捨てしかば、教主釈尊唯我一人と誓ってすでに娑婆世界に出で給ひぬる上はなにをか疑ひ候べき。鸞・綽・導・心・觀・然等の六人の人々は智者なり。日蓮は愚者なり、非学生なり。但し上の六人は何れの国の人ぞ、三界の外の人か、六道の外の人か、阿弥陀仏

に値ひ奉りて出家受戒して沙門となりたる僧か。今の人々は將門・純友・清盛・義朝等には種性も及ばず、威徳も足らず。心のがうさは申すばかりなけれども、朝敵となりぬれば其の人ならざる人々も、將門か純友かと舌にうちからみて申せども、彼の子孫等もとがめず。義朝など申すは故右大将家の慈父なり。子を敬ひまいらせば父をこそ敬ひまいらせ候べきに、いかなる人々も義朝・為朝など申すぞ。此則ち王法の重く逆臣の罪のむくみなり。上の六人も又かくのごとし。釈迦如来世に出でさせ給ひて一代の聖教を説きをかせ給ふ。五十年の説法を我と集めて、浅深勝劣・虚妄眞実を定めて、四十余年は未だ眞実を顕はさず、已今当第一等と説かせ給ひしかば、多宝・十方の仏眞実なりと加判せさせ給ひて定めをかれて候を、彼の六人は未顕眞実の觀經に依りて、皆是眞実の法華經を第一第二の悪人の為にはあらずと申さば、今の人々は彼にすかされて数年を経たるゆへに、將門・純友等が所従等彼を用ひざりし百姓等を、或は切り、或は打ちなどせしがごとし。彼をおそれて従ひし男女は官軍にせめられて、彼の人々と一時に水火のせめに値ひしなり。

今日本国の、一切の諸仏菩薩、一切の經を信ずるやうなれども、心は彼の六人の心なり、身は又彼の六人の家人なり。彼の將門等は官軍の向かはざりし時は、大将の所従知行の地且く安穩なりしやうなりしかども、違勅の責め近づきしかば、所は修羅道となり、男子は厨者の魚をほふるがごとし。炎に入り水に入りしなり。今日本国も又かくのごとし。彼の六人が僻見に依つて、今生には守護の善神に放されて三災七難の国となり、後生には一業所感の衆生なれば阿鼻大城の炎に入るべし。法華經の第五の巻に末代の法華經の強敵を仏記し置き給へるは如六通羅漢と云云。上の六人は尊貴なること六通を現ずる羅漢の如し。

然るに淨蓮上人の親父は彼等の人々の御檀那なり。仏教実ならば無間大城疑ひなし。又君の心を演ぶるは臣、親の苦をやすむるは子なり。目犍尊者は悲母の餓鬼の苦を救ひ、淨蔵淨眼は慈父の邪見を翻し給ひき。父母の遺体は子の色心なり。淨蓮上人の法華經を持ち給ふ御功德は慈父の御力なり。提婆達多は阿鼻地獄に墮ちしかども天王如来の記を送り給ひき。彼は仏と提婆と同性一家なる故なり。此は又慈父なり、子息なり。淨蓮上人の所持の法華經いかでか彼の故聖靈の功德とならざるべき。事多しと申せども止め畢んぬ。三反人によませてきこしめせ。恐々謹言。

六月二十七日

日蓮花押

返す返すするがの人々みな同じ御心と申させ給ひ候へ。